

森林・林業技術者のスキルアップのための取組 — 青少年森林教育に関するプログラムを実施

岩手大学農学部附属寒冷フィールドサイエンス教育研究センター

澤口 勇雄



宮林東京農業大学教授による特別講演



御明神演習林でネイチャーゲームの進め方を学ぶ受講者

寒冷フィールドサイエンス教育研究センターは、地域貢献に資する活動の展開を一つの大きなテーマとして、分野ごとにそれぞれの特徴を活かしつつ、積極的な取組を行ってきている。年々、回を重ね、何らかの形で大学との関わりをもつ裾野を広げていくことは重要であり、その広がりを大きくしていくこそが「地域全体の大学」を作っていく大きな力になると考えている。

本年5月(17～20日)、当センターが主催し、(社)国土緑化推進機構の協賛を得て、官・学連携による実務技術向上のための研修(「森林・林業技術者のための青少年森林教育スキルアッププログラム」(以下、「プログラム」という。))を行った。

今回のプログラムは、森林・林業技術者を対象に、青少年森林教育手法(技術)の習得・研鑽を目的として、ひいては青少年の森林・林業に対する理解の増進に資することまでを視野に入れたものである。

受講対象者は東北森林管理局職員、岩手県職員及び岩手大学演習林技術職員(計16名)である。互いに森林・林業に携わりつつも、異なる立場や性格を有する職場の者達が各々の経験と知見を持ち寄りながら、専門の講師陣の指導のもと、理解しやすくかつ実践的な森林教育技術を身につけていくことにより、個々のスキルアップを図るとともに、相互にネットワーク的なつながりを作り、地域における青少年森林教育の浸透・底上げに大きく寄与することをねらいとしている。

東京農業大学の宮林茂幸教授を講師に迎え、大学図書館で行われた特別講演には、プログラム受講者のほか、学生

や一般の聴衆を含め約50名が集まった。宮林教授は、「森林教育を考える」と題し、「体験教育の役割は物の価値観や感動する心をはぐくみ、生きる力を養う」と農林作業体験の意義を説明し、教育効果として、

- ①環境の変化を肌で感じ自然との結びつきを実感する、
 - ②農村社会が持つ家族や地域との結びつきを再確認する、
- などの点を挙げた。

その後、受講者は御明神演習林に場所を移し、森林教育の進め方、寒冷地の森林植物の教授法及び野生動物の調査法について、森林教育を行う立場からの知識・技術を学んだ。

研修後に行ったアンケート結果からも、課目を一つひとつ経ながら、受講者の関心、意識が確実に急速に高まり、今後の森林教育の実践に向けて動機付けが行われたことが伺われた。また、異なる機関の職員同士の交流自体を有効と見ている回答が多く得られている。

東北森林管理局と岩手大学は、学術研究の分野において援助・協力を行うことを目的とする協定を締結しているが、今回のプログラムは、当該協定に基づく具体的な取組の一つにも位置づけているものである。

今回のプログラムのような取組を通じて、幅広い関係者の連携を築き、そのネットワークを活用しながらそれぞれの地域で森林・林業技術職員が活躍し、広く一般市民の森林・林業に対する関心を高める機動力になっていくことが期待される。

全国の農業改良普及員のための高度先進技術研修

岩手大学農学部附属寒冷フィールドサイエンス教育研究センター 星野次汪



平成16年度 革新的農業技術習得研修「高度先進技術研修」

農政の重要な課題である米政策の抜本改革に向け、農業改良普及職員に普及現場における技術的課題解決のための調査能力の向上を図るため、農林水産省経営局では全国の農業改良普及職員を対象とした「平成16年度革新的農業技術習得研修事業」を企画した。

岩手大学では寒冷フィールドサイエンス教育研究センターが中心となってこの委託を受け、「水田農業改革に伴う集落型経営の育成手法と管理方法」について、9月6日～8日の3日間、全国の農業改良普及員28名に研修を行った。

研修をより高度に先進的な内容とするために、当大学農学部の木村伸男先生(集落型経営体の育成方法)、寒冷フィールドサイエンス教育研究センターの星野次汪・佐川 了(集落型経営体の土地利用)の他に、他大学・研究機関の第一線でご活躍の先生方にも講師をお願いした。山形大学農学部楠本雅弘教授には集落型経営体の経営者の機能・役割、経営者能力、経営体の管理、特に財務会計管理法について講義していただいた。東北農業研究センター佐藤百合香主任研究員には同氏が開発した従来型技術とは異質な新技術が現場に普及・定着するまでの様々な障壁とその具体的な解決法を実験結果や体験事例を基に講義していただいた。茨城大学農学部安藤光義助教授には多様な地域性をもった集落型経営体の展開方向と法人化について、地域特異性による類型化などから講義していただいた。また、岩手県の農産物を取り扱っている府金秀忠氏、平川真人氏、田村治彦氏をお招きして「実需・流通からみた国産農産物への期待」についてパネルディカッションを行い、研修生との熱い意見交換を行った。さらに、平川食品の工場を見学し、平川真人氏は「消費者から喜ばれる食品作り」をするために、原料の大豆生産のあるべき姿について現地に密着した視点が述べられた。また、花巻農業協同組合では大和章利氏から集落型経営体育成のこれまでの取り組みについて説明があり、その後、研修生との熱心な意見交換を行った。

最後に、研修生が本研修で学んだ内容を担当する普及現場でどのように活かしていくかについて発表を行い、参加者全員で総合討議を行い、研修を終えた。寝食を共にし、二夜にわたる情報交換を通して、地域を越えた懇親ができたことは大きな収穫であった。

初めての 滝沢農場 公開



馬術部による乗馬体験



シクラメンの販売



ジャージー牛の肉の販売

寒冷フィールドサイエンス教育研究センター 坂本甚五郎

滝沢農場は学生への農業実習や教育研究のフィールドとして、また、親子科学体験教室などの地域貢献を行ってきました。大学の地域貢献の役割が一層重要とされている今、初めての試みで多くの不安を抱えながら「食と農～滝沢農場生産物にこだわって」をテーマに、滝沢農場の一般公開を行いました。この農場公開は新米や豆腐などのほか、りんごについては摘み取りながら試食していただくために、滝沢農場の生産物が最も多い、11月14日に行いました。初めての農場公開と天候にも恵まれたこともあって、1400名を越える来場者がありました。いずれの試食品や販売品も滝沢農場の生産物とその加工食品で、新米や古代米、新豆で作った豆腐、りんごの試食、ジャージー牛乳の試飲やヨーグルトの試食など、野菜や花の販売も行いました。さらに放牧主体で滝沢農場産飼料と国産飼料だけで飼養されているジャージー牛の肉の販売も行いましたが、とても美味しいと高い評価を得ま

した。馬術部による乗馬体験や子牛との触れ合いコーナー、大型農業機械への試乗などは子供達の人気を集めました。今回の農場公開においていただいた方々のなかには、りんごの収穫体験、販売品の購入、試食などをしながら、家族で新鮮な食物を堪能しながら農業や食物について考えていただけたと思います。また、大学農場に新しい技術等を求めて来られた方もおりましたので、来年度は相談コーナーの開設を検討したいと思います。アンケートには感謝と慰労の言葉が多く書かれておりましたし、建設的な提案が数多く寄せられました。新しい課題やこれからの方向を探る上で、とても意義のある行事であったと考えています。また、多数の来場者を36名の学生ボランティアに支えられて円滑に対応することができ、盛況のもとに終わることが出来ました。

教育
トピックス

佐川了講師が第1回全国大学農場教育賞受賞(平成16年度)

寒冷フィールドサイエンス教育研究センター 星野次汪

佐川了講師は昭和60年から農学部附属滝沢農場に勤務し、学生の実習を担当しながら農場の管理運営のほか、地域貢献に努力してきた功績が認められ、第1回全国大学農場教育賞を受賞した。

主な業績は実習教育への熱意と創意工夫が挙げられる。平成14年度に農場が寒冷フィールドサイエンス教育研究センターに改組されたのを機に、農学部1年次学生に「総合フィールド科学実習」(230名、週1回)を開講し、作物栽培・管理の指導を行い、収穫の喜びを体験させ、農学の目的意識を醸成している。さらに、2年次学生には、田植え、除草、稲刈り、米の食味試験、リンゴの真冬の剪定、摘花、摘果、収穫、ブルーベリーの収穫、ジャム加工、大豆の播種、収穫、味噌作りなど、プレハーベストからポストハーベストまで一貫した指導をしている。3年次学生の夏季特別宿泊実習では寝食を共に、現場感覚に優れた学生の育成に努力している。学生の実習への高い評価に満足す

ることなく、毎年実習カリキュラムに創意工夫を加えている。地域貢献として、平成3年から開かれた大学の先鞭ともなる市民向け「農業体験教室」や幼稚園、養護学校などへの実習協力を行っている。

同氏の長い間の貢献が認められたことは、職場を同じくする者として大きな誇りである。



田植えの指導をする佐川講師

農業改良普及員のためのプロジェクト研修

寒冷フィールドサイエンス教育研究センター 星野次汪

農林水産省経営局では農業改良普及職員を対象とした「平成16年度革新的農業技術習得研修事業」を企画した。岩手大学では寒冷フィールドサイエンス教育研究センターが中心となって、全国の農業改良普及職員を対象とした「高度先進技術研修」(平成16年9月6~8日)と地域の農業改良普及職員を対象とした「プロジェクト研修」を行なった。「プロジェクト研修」は、「水田農業改革に伴う集落型経営の育成方法」について、岩手県4名、青森県1名、山形県1名の6名の改良普及員は、6月から月1回のペースで11月まで7回行った。

研修をより実践的にするために、当大学農学部の木村伸男先生が、毎回レポートを課して次回に報告させ、そのレポートを基に相互討論を行い、問題意識をより先鋭化していく手法で、研修を行った。また、研修生の担当地域に研修生が全員で出向き、集落営農実践者との現地討論を行った。最終日には、研修生が本研修で学んだ内容と担当現地での成果を発表した。これらの成果は研修テキストと研修レポートとしてまとめられた。



参加研修生とスタッフ

いわて農業法人ビジネススクール開校

寒冷フィールドサイエンス教育研究センター 高橋ちえ子

積極的な経営展開を目指し、法人化した農業経営を一層、充実・強化することを目的として、岩手大学農学部、岩手県農業会議および岩手県農業法人協会の3者が協力し、「いわて農業法人ビジネススクール」を開校致しました。

本年度は21名の入学者を迎え、11月4日~2月8日までの期間に5回の講義(I・II)を行いました。

全員が単位を取得し、修了証書を得ることができました。

上・下流-ムラとマチの連携

寒冷フィールドサイエンス教育研究センター

10月16日に室根村曲ろく・ふれあいシンポジウムを行なった。基調報告では展した様々な連携が評価されたが、そ
たり、新たな発展に導く回路について
ついて、今後の課題として指摘された
育成してきた森林資源がマーケットを
遇、健全な育成林も必ずしも安定的な
と等の問題が出された。連携と交流が
与するためには、かつて農山村が都市
つまりモノを通じた連携という点、物
と都市という所にもう一度たちがえる